

教皇様の聲


5

241号

Libreria Editrice Vaticana, Citta
del Vaticanoの転載許可済 2000


聖母の取り次ぎ

〔教皇様は、聖母マリアの役割についてお話しになった。〕

 御父に関するカテケージスを終わるにあたって、聖母マリアについて考えてみようと思いますが、そのために今日は、私たちが御父に向かって歩いていく中で、聖母がどのような役割を果たしてくださるか確認してみたいと思います。救いの歴史の中でのマリアの存在を神ご自身がご希望になりましたが、神はこの世に御子を送ることをお決めになった時、御子が一人の女性から生まれることをご希望になったのです。(ガラテヤ4・4参照)

こうして神は、御子を最初に迎えるこの女性を通して、人々が御子を知ることができるようお決めになりました。

そしてマリアは、救い主を全人類に与える母親として、御父から人間へと至る道の中に立つこととなりましたが、同時に、聖霊においてキリストを通して御父のもとへ至るために私たちが取るべき道の途中にもマリアは居てくださいます。(エフェソ2・18参照)


 御父への旅路の途中におられるマリアを理解するには、キリストが「道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14・6)こと、また神と人間との間の唯一の仲介者であることを、全教会と共に確認しなければなりません。(1テモテ2・5参照) マリアはキリストの唯一の仲介に組み入れられ、完全に御子のご意志にお仕えになります。このことに基づいて、公会議は教会憲章の中でこのように強調しています。「人々に対する母としてのマリアの役割は、キリストのこの唯一の仲介を決して曇らせたり減少させたりするものではなく、かえってキリストの仲介の力を示すものである。」(60番) 教会の中で、マリアの役割をキリストの仲介と同等・同一のもののようにみなしたり位置付けたりすることでは決してありません。

回勅「救い主の母」ではっきり述べたように、母親としてのマリアの仲介は「キリストにおける仲介」(38番)です。公会議は説明しています。「実に、聖なる処女が人々の救いに対して及ぼす影響はすべて、客観的な必要性からではなく、神の好意から生ずるものであり、満ちあふれるキリストの功績

から流れ出て、キリストの仲介に基づき、その仲介に全く依存し、その仲介からいっさいの力をくみ取るのである。それは、キリストと信者との直接の一致をけっして妨げるものではなく、かえって助けるものである。」(「教会憲章」60番)


マリア自身はキリストによって一番最初にあがなわれた方です。というのも、ピオ九世が「無原罪の御宿りに関する大勅書」で述べているように、「人類の救い主イエズス・キリストの功績」(DS,2803)によって、神である御父は、マリアがその懐胎の瞬間から恩恵を受けられるようお取り計らいになったからです。救いにおけるマリアの協力は、全てキリストの仲介に基づいています。公会議は再びこの点を明らかにしています。キリストの仲介は、「唯一の泉に参与する他の協力を拒絶するものではなく、かえって種々の協力をもたらすものである。」(「教会憲章」62番参照)

この観点から考えると、マリアによる仲介は、キリストの仲介の最高の実りとなります。またマリアの仲介は、本質的に私たちが神とより深く親密に出会えるようにするためのものです。「教会はこのような従属的なマリアの役割をためらわず宣言し、絶えずこれを経験し、なおこの母の保護にささえられて、仲介者・救い主にいっそう親密に一致するよう、これを信者の心に勧める。」(同上)

 実際マリアは、自分自身に注目が集まることを望みませんでした。マリアは、イエスと天国の御父を見つめながら地上でお暮らしになりました。マリアの最大の望みは、全てのまなざしがイエスと御父に向かうことであり、信仰と希望のまなざしが、御父がお送りになった救い主にそそがれることです。


マリアは、信仰と希望のまなざしの模範ですが、とりわけ御子の苦しみの真只中で、その心が全く御子と御父への信仰に満ちていたことは注目に値します。イエスの十字架の死に深く失望した弟子たちに対して、マリアは悲しみに試みられながらも、イエスの預言が必ず実現するという揺るぎない確信を心に抱き続けていました。「人の子は...三日目に復活する。」(マタイ17・22~23) 十字架上で死去され

た御子をその腕で抱いた時でさえ、この確信を失いませんでした。

 マリアは信仰と希望のまなざしを保ちながら、教会と信者がいつも、キリストが明らかにした神の御旨を果たすよう力づけてくれます。カナの奇跡で召し使いたちが聞いた言葉はどの時代にも反響します。「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください。」（ヨハネ2・5）

召し使いたちはマリアの勧めに従って水がめの淵まで水を満たしました。今日、マリアは私たちに同じことを頼んでおられます。マリアが熱心に勧めていることは、新しい時代に入るに際し、キリストが御父の名において福音で教えたことを全て果たすことです。そしてそれは今、私たちの内においでになる聖霊がお勧めになることを実行に移すことなのです。キリストのお勧め通りに行なえば、次の千年期は新たにより福音的でより純粋なキリスト教的側面

を持つようになり、マリアの最も深く強い望みに応えることとなります。

 「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」という、キリストに関する言葉は、旅路の目的地である御父についても思い起こさせます。この言葉は、ご変容の山で鳴り響いた「これは私の愛する子、... これに聞け。」（マタイ17・5）という御父の声と一致します。キリストの言葉と聖霊の光によって、御父ご自身が私たちを呼び、導き、世話をしてくださるのです。私たちの聖性は、御父の言葉の全てを実行することで成り立ちます。ここで明らかになってくるのが、神の御旨を完全に果たすマリアの生活がいかに価値あるものであったかということです。マリアに伴われ、支えられて、御父の手から新しい千年期を受け、謙遜に寛大な信仰をもって、御父の恩恵に応える決意をしましょう。（2000.1.12）

シナイ山巡礼

〔教皇様、念願のシナイ山巡礼を実現させる〕

兄弟姉妹の皆さん、

1 大聖年を迎えた今年、私たちは信仰に導かれて神の足跡をたどって巡礼を行ない、神が様々な時代に歩まれた道を黙想します。神はその歩みの中で、全人類に対する忠実な愛の神秘をお示しになりました。今日、大きな喜びと深い感動を抱きながら、ローマ司教はシナイ山への巡礼を行います。この聖なる山は神がここでお示しになったことを記念するかのよう塔のごとくそびえ立ち、私たちを引き寄せるのです。神はここで御名を示され、掟として契約の十戒をお与えになりました。

これまでなんと多くの人々がこの地を訪れたことでしょうか。ここで神の民がテントを張り（出エジプト19・2参照）、預言者エリヤは洞窟に避難し（1列王記19・9参照）、殉教者カタリナはここを永眠の場所としました。様々な時代の大勢の巡礼者が、聖グレゴリオが「希望の山」（「モーセの生涯」2,232）と呼んだこの山を登ってきました。いく世代もの修道者がここを見守り祈ってきました。私たちは謙遜にその足跡をたどり、「聖なる地」、アブラハム、イサク、ヤコブの神が人々を解放する使命をモーセに託した土地をたどります。（出エジプト3・5～8参照）

十戒は生命と自由の掟

2 焼き尽くすことのない火のように、私たちの知識や考えを越える不思議な方法で、神はご自分を

お現わしになります。神は、すぐ近くにおられると同時に遠くにもいらっしゃいます。また、この世にはいらっしゃいますがこの世のものではありません。神は私たちに会いに来てくださいますが、私たちに所有されることはないでしょう。「私はあるという者だ。」神は名前でない名前を持つお方です。本質と存在が一つである神の深淵。それ自体存在である神。このような秘義を前にして、神が命じたように「靴を脱ぐ」ことをしないまま、この聖なる地で主を賛美することができるでしょうか。

ここシナイ山で、「神とはどのような方か」という真理は、契約のいしずえ、保証となりました。モーセは「輝く暗闇」（「モーセの生涯」2,164）に入って行き、「神の指で記された」（出エジプト31・18）律法を与えられました。ところでこのモーセの律法とは何でしょうか。それは生命と自由の掟です。

人々は紅海で大きな解放の喜びを味わいました。また、神の力と忠実さに出会い、約束どおり人々に自由を与える神を見い出しました。しかし今シナイ山で、この同じ神は決して破棄しない契約を結んで、その愛を証明します。神の掟に従う人は、永遠に自由を知るでしょう。出エジプトとイスラエル人との契約は単なる過去の出来事ではありません。この出来事は、永遠に神の民すべてが向かう目的です。

3 神とモーセのシナイ山での出会いは、人を自由にする従順というキリスト教の中心的秘義を記します。その完成が、人間となられ、十字架上で苦しまれ

たキリストの完全な従順において見い出されます。

(フィリピ2・8、ヘブライ5・8~9参照) イエスのように従うことができれば、私たちも真の自由を手に入れることができるでしょう。(ヘブライ5・8参照)

十戒は、暴君のような神が独断的に押しつけたものではありません。十戒は石に刻まれる前に、普遍的な道徳の掟、どのような時どのような場所でもあてはまるもの、あるいは掟として人間の心に刻み込まれていました。いつもと同じように今日も十の言葉は、個人の生活、社会、国家にとって変わることはない唯一の基本原理です。人類家族の将来は、今日も変わらず十戒にかかっています。この掟は、破壊的な力を持つ利己主義、憎しみ、偽りから人々を救います。また、見せかけの神を指摘し、それが人々を隷属状態、つまり神を除外する自己愛、正義の秩序をひっくり返す権力と快楽への欲望に引き込むことを示し、人としての尊厳、隣人の尊厳を損なうことを明らかにします。偶像崇拜から遠ざけ、自由を与え、いつも共にいてくださる神に従うならば、シナイ山で過ごしたモーセのように神の光で燃え「栄光に輝く」(ニサの聖グレゴリオ、「モーセの生涯」2,230) ことでしょう。十戒の掟を守るとは神に忠実であることです。しかし同時に、それは自分自身とその本質、最も深く強い願いに忠実を保つことでもあります。シナイ山からは今でも風が吹きますが、この風は、人間の成長の中でまたそれを通してご自分が崇められるという神の願いを思い起こさせます。「神の栄光は生きる人間である。」(聖イレネオ) この言葉からもわかるように、シナイ山の風が絶え間なく招いているのは、家族である人類の働きで、唯一の神を信仰する者同士の対話が進められることです。この対話は、私たちの出会いが神において実現することも示しています。この神は全能、あわれみ深い宇宙の創造主・歴史の主であり、私たちの地上での生命が終わる時、完全な正義によって裁く方です。

光栄ある自由のために神の子として造られた人間

今聞いたばかりの福音朗読によると、シナイ山の

出来事がもう一つの山、ご変容の山で完成されることがわかります。弟子たちの前で、イエスが神の栄光に輝き、モーセとエリヤはイエスのそばに立ち、神の啓示の完成が栄光のキリストに見い出されることを証明しました。

神はご変容の山でシナイ山での時のように雲の中からお話しになりました。けれども今回は、神はこう言われます。「これは私の愛する子。これに聞け。」(マルコ9・7) 神は御子に聞くよう命じられます。というのも「子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知るもの」(マタイ11・27) はいないからです。こうして、父としての神を知るのです。

「アッパ、父よ。」(ガラテヤ4・6) という呼びかけ以上にふさわしい名前はありません。そしてイエスにおいて、私たちは神の息子であり娘であることを知るのです。神が出エジプトやイスラエル人との契約で人々を解放したのは、奴隷ではなく、「神の子供たちの栄光に輝く自由」(ローマ8・21) のために造られた息子や娘だったからです。

というわけで、私たちが「キリストに結ばれて、律法に対しては死んだ者」(ローマ7・4) であるという聖パウロの言葉は、シナイ山の掟が過去の出来事ではないことを示しています。今は愛すべき御子の声を通して、この十戒が聞こえて来ます。イエス・キリストのおかげで救われ、真の自由を手に入れた者であれば、イエスとの結び付きは、たくさんの規定による外的なものではなく、イエスの心の最も奥深くにある愛によって内的に与えられるものであることに気が付くでしょう。十戒は自由の掟ですが、この自由とは盲目の感情に従うことではありません。それを果たすことがたとえ重荷であっても、あらゆる状況のもとで善を愛し、善を選ぶ自由のことです。私たちは非人間的な掟に従うではありません。必要なことは、聖霊においてイエス・キリストを通り、御父に対して、愛ゆえに全く従うことです。(ローマ6・14、ガラテヤ5・18参照) 神はシナイ山でご自分をお現わしになり、掟を与えることによって、人間とは何かをお示しになりました。シナイ山は真理の中核に位置し、人間とその向かうべき目的について明らかにするものです。

(…)

(2000.2.26)

生命の扉であるキリスト

[ルルドのマリアの祝日、教皇様は、聖ペトロ広場に集まった病気を抱える人々にお話しになった。]

1 (…)

皆さんは病気を背負いながらも、大聖年を祝うために今日この聖ペトロ広場を訪れました。この大聖年は、神が私たちを特別に訪問なさる年でもありま

す。このことを心に留めながら、皆さんを心から喜んでお迎えします。ペトロの後継者は、皆さんの不安や心配を感じています。ようこそいらっしゃいました。皆さんとその健康を管理する人々、愛の献身

によって皆さんのそばにいる家族やボランティアの方々と共に、今日この大聖年の喜びを心から祝いましょう。

(…)

キリストの十字架は苦しみを理解するための鍵

2 「高い所からあけぼのの光が我らを訪れる。」
そうです。今日、神が私たちに訪れてくださいます。どんな時でも神は共にいてくださいます。そして、大聖年は一層特別に神の訪れを感じる時です。神の御子は人となり、全人類を訪問され、一人一人にとって「扉」となりました。生命の扉と救いの扉です。救いを見い出したい者はこの扉を通らなければなりません。(…)

皆さんの中には何年も寝たきりで苦しんでいる方々もいることでしょう。今日ここに集まることによって、肉体的精神的苦痛の大きな安らぎがもたらされるよう神に祈ります。健康な人、病気の人、全ての人のためのこの感動的な式典が、救いをもたらす苦しみの価値を深く考える機会となるよう願っています。

3 痛みや苦しみはこの世の謎の一つです。健康は神からのお恵みですから、病気を克服するために努力することは当然の権利です。けれども同じく大切なのは、苦しみがやって来た時にそれが神のご計画かどうか判断することです。この判断の「鍵」はキリストの十字架に見い出されます。受肉なされた御言葉は私たちの弱さを包み込み、十字架の秘義においてそれをご自身でお引き受けになりました。その時以来、どんな苦しみも意味を持ち得るものとなりましたが、このことの重要性は並外れたものです。ご受難の日から二千年間、十字架は私たちに対する神の愛の究極的な現われとして輝いています。人生の中で十字架を受け入れる人は、苦しみが信仰によって照らされ、希望と救いの源となることを体験します。

病気を抱える皆さんはとても重い十字架を担わなければなりません。キリストが皆さんにとって扉となるよう願っています。また、皆さんに付き添い世話をされる人々もキリストの扉を見つけることができますように。よいサマリア人のように、神を信じる人は誰でも、苦しんでいる人々に愛を示さなければなりません。苦しみに遭っている人々を見て、「通り過ぎる」わけにはいきません。大切なことは、立ち止って人々の苦しみに目を向け、寛大にそ

の苦しみを共にすることです。そうすれば、人々の重荷や困難は和らげられるでしょう。

キリストは人々の嘆きと悲しみを負う

4 聖ヤコブは次のように記しています。「あなたの方の中で病気の方は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したのであれば、主が赦してくださいませ。」(ヤコブ5・14～15) まもなく皆さんは病者の塗油を授けられますが、その時、聖ヤコブのこの勧めを特に思い出すことでしょう。精神的肉体的活力を取り戻すと、この秘跡がはっきりと示していること、苦しむ人々にとってキリストは生命に導く扉であることが明らかになります。

(…)

キリストは十字架に付けられ復活する救い主として、その愛のために「私たちの病」を担い「私たちの痛み」(イザヤ53・4)を忍ばれました。

5 教会は新しい千年期に入り、あがないと救いのメッセージを苦しむ人々への福音として心に留めまします。皆さんは福音に対して特別な証人です。第三千年期には、特に病気のキリスト者からの証言が期待されています。また人々の健康管理の使徒的な仕事に携わる皆さん、様々な形で病人への宣教に関わる皆さん、この非常に重要な感謝すべき仕事を持つ人々の証言も期待されています。ルルドを訪れた無原罪のおとめを、今日喜びと感謝の気持ちをもって一緒に思い起こしていますが、このおとめが皆さん一人一人にその御目を向けてくださいますように。マッサビーユの洞窟で、マリアはベルナデッタにメッセージを託し、私たちが福音の中核を理解できるようになりました。つまり改心と償い、祈り、そして信頼して神の御手に自己を委ねることです。

聖母マリアの賛歌で、おとめマリアの訪問と共に御父を賛えましょう。これは、貧しい人々に対する希望の賛歌です。この世で病気や苦しみに遭っている人々は、神が救い主としてそばにいてくださることを知っているのです。喜びにわきます。

幸いなおとめと共に「私の魂は神を誉め賛える」ということをはっきり示しましょう。そして、歩みを真の大聖年の扉へと向けるのです。イエス・キリストは昨日も今日も世々に同じである。

(…)

(2000.2.11)

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人 ■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920

FAX. 0797-34-4920 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

* 電話受付時間は火・木曜日午前10:00～11:30、水曜日午後1:30～午後5:00となっています。

キリストの復活

〔「カトリック教会のカテキズム」より(試訳)〕

空の墓

640 「なぜ生きておられるお方を死者の中に捜すのか。あの方はここにはおられない。復活なさったのだ」(ルカ24・5-6)。復活に関わる一連の出来事の中で、最初に見つけられたのは、空の墓である。これはそれ自体復活の直接の証明にはならない。墓にキリストの体がなかったことは、別の仕方で説明することができよう(ヨハネ20・13; マテオ28・11-15参照)。しかしながら、空の墓は、だれにとっても決定的なしるしとなった。弟子たちにとっては、墓が空であることを見たことは、復活の事実を信じるための第一歩となった。まず聖なる婦人達(ルカ24・3、22-23参照)、そしてペトロ(ルカ24・12参照)がそうであった。「イエスが愛しておられた弟子」(ヨハネ20・2)は、墓に入って「亜麻布がおいてある」(ヨハネ20・2)のを発見したとき、「見て、信じた」(ヨハネ20・8)と言っている。これは、彼らが空の墓をのぞいたとき、イエスの体がなくなったことは人間の仕業ではないと、またイエスがラザロのように単にこの地上の命に戻ったのではないと感づいた(ヨハネ20・5-7)ということの意味する。

復活したイエスの出現

641 マグダレナの MARIA と他の聖なる婦人達は、金曜日の夕方は安息日が近づいたためイエスの埋葬を急いでしなければならなかった(ヨハネ19・31、42参照)。そこで日曜の朝早くイエスの遺体に油を塗りに行ったが(マルコ16・1; ルカ24・1参照)、復活したイエスが最初にお現れになったのは彼女たちであった(マテオ28・9-10; ヨハネ20・11-18参照)。その結果この婦人たちが、使徒たち自身に最初にキリストの復活を知らせに行った(ルカ24・9-10参照)。イエスもすぐに、まずペトロに、そして十二使徒にご出現された(1コリント15・5参照)。ペトロは、兄弟たちの信仰を固めるように命じられていたので(ルカ22・31-32参照)、他の使徒たちより先に復活した主に会った。「本当に主は復活してシモンに現れた」(ルカ24・34)という弟子たちの叫びは、彼の証言に基づいている。

642 復活後の何日かに起こった出来事はことごとく、使徒たち一人一人に、そして誰よりもペトロに、復活の朝に始まる新しい時代の建設に生涯をかける決心をさせた。使徒たちは、キリストの復活の証人とし

て、師の教会の礎石となる。初代の教会の信仰は、生きた人間の証言に基づいている。この人々は、キリスト信者にとっては直接知っている人であり、大部分の信者にとってはまだ一緒に生活していた人たちである。これらの「主の復活の証人」(使徒行録1・22参照)とは、なによりもまずペトロと十二使徒であるが、彼らだけでもない。パウロは、ヤコボとすべての使徒たち以外に、イエスが一度に五百人以上の人に現れたと言っている(1コリント15・4-8参照)。

643 これらの証言を前にすると、キリストの復活を肉体の復活でないと解釈したり、それが歴史的事実であることを否定したりすることは不可能である。弟子たちの信仰が、師自らが前もって預言していた(ルカ22・31-32参照)受難と十字架での死によって厳しい試練にさらされたことは周知の事実である。受難が引き起こしたショックは非常に大きく、(少なくとも彼らのうちの何人かは)復活の知らせをそれほど容易には信じなかった。福音書は、神秘的な興奮に浸っている弟子たちの姿を描くどころか、打ちひしがれて(「暗い顔をして」ルカ24・17)恐れに震えている(ヨハネ20・19参照)様子を伝える。そういうわけで、弟子たちは、墓から帰った婦人達を信じず、彼らには「この話がたわごとのように思われた」(ルカ24・11)。イエスは、復活の日曜日の夕方十一人にお現れになったとき、「その不信仰とかたくなな心をおとがめになった」(マルコ16・14)。

644 復活ということは、弟子たちにはあまりに現実離れしたことに思えたので、復活したイエスの姿を前にしても、まだ疑いが晴れず(ルカ24・38参照)、幽霊を見ているのだと考えた(同39参照)。「彼らは喜びのあまり信じられず、不思議がっていた」(同41)。使徒トマスも同じ不信仰の試練を味わい(ヨハネ20・24-27参照)、マテオが記録しているガリラヤでの最後の出現においても、「疑う者もいた」(マテオ28・17)。それゆえ、キリストの復活を弟子たちの信仰(あるいは迷信)から生まれた作り話とする仮説は、根拠がない。事実はまったくその逆で、復活の信仰は、神の恩恵の働きのもとで、復活したイエスの現実を目の当りにしたところから生まれたのである。

復活したキリストの体

645 イエスは復活してからも、弟子たちに自分を手で触れさせたり(ルカ24・39; ヨハネ20・27参照)、食事を一緒にしたり(ルカ24・30、41-43; ヨハネ21・9、3-5参照)して親しい関わりをもたれた。このようにして、彼らに自分が霊ではないことを示し、そして特に受難の跡を見せることによって、彼らが見ている復活した体が苦しみを受け十字架上で死んだものと同じ体であることを(ルカ24・40; ヨハネ20・

20、27参照)お教えになる。しかしながら、この血肉からできた本当の体は、同時に以前はなかった栄光の体の特徴を備えている。すなわち、空間と時間に縛られないが、望む時に望む所に現れることができる(マテオ28・9、16-17;ルカ24・15、36;ヨハネ20・14、19、26;21・4参照)。それは、御父の神としての支配以外に何もこの体をこの地上に縛りつけておくことができないからである。この理由で、復活したイエスは、自分の好きな姿で出現できた。あるときは園丁の姿で(ヨハネ20・14-15参照)、あるときは弟子たちが見慣れていたのとは異なる「別な姿で」(マルコ16・12)現れ、そうすることで彼らの信仰を蘇らせようとされた(ヨハネ20・14、16;21・4、7参照)。

646キリストの復活は、単にこの地上のもとの生命に戻ることはない。主自身が以前にヤイロの娘やナイムの青年やラザロを蘇らせた場合の復活とは異なる。これらの復活はたしかに奇跡的な事件であったが、蘇った人々は、イエスの力によって、再び「普通の」人間の生命を取り戻しただけで、いつかもう一度死なねばならなかった。キリストの復活は、本質的にこれらとは異なる。その復活した体において、死の状態から、時間と空間を越えた別の生命の状態に移ったのである。復活において、イエスの体は聖霊の力に満たされた。つまり、栄光の状態の神的生命に参加したのである。それゆえ、聖パウロはキリストについて「天に属する人」(1コリント15・35-50参照)とすることができた。

(647~650省略)

救いにおける復活の意味と重要性

651「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」(1コリント15・14)。復活は、なによりもキリストが行い教えられたことがすべて真実であったことの証明である。もし、キリストが、以前約束したとおりに復活することによって、自分の権威が神のものであることを証明したのなら、彼が教えた真理は、人間には理解不可能なものも含めて、正しいという結論が導き出せる。

652キリストの復活は、旧約聖書(ルカ24・26-27、44-48参照)とキリスト自身(マテオ28・6;マルコ16・7;ルカ24・6-7参照)の約束の成就である。「聖書に書いてあるとおり」(1コリント15・3-4、ニケア・コンスタンチノーブル信経参照)という表現は、キリストの復活がこれらの預言を成就したことを示す。

653イエスが神であるという真理は、復活によって証明された。イエスは、「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある』ということが分かるだろう」(ヨハネ8・28)とすでに言われていた。十字架刑で死んだ者の復活は、彼が本当に「わたしはある」という者、すなわち神の子であり神自身であることを証明した。聖パウロはユダヤ人に次のように言うことができた。「神はイエスを復活させて、わたしたちの子孫のためにその約束を果たしてくださったのです。それは詩篇の第二篇にも『あなたはわたしの子、わたしは今日あなたを産んだ』と書いてあるとおりです」(使徒行録13・32-33;詩篇2.7参照)と。キリストの復活は、神の子の託身の奥義と密接な関係にある。すなわち、神の永遠のご計画によれば、復活によって、託身が完成されたのである。

654過越しの奥義には二つの面がある。一方で、キリストの死によって我々は罪から解放され、他方でその復活のお陰で新しい命への道が開かれた。新しい命とは、まず第一に義化ということであって、神が我々に神の恩恵を取り戻して下さったのである(ローマ4・25参照)。それは、「キリストが、…死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためです」(ローマ6・4)。義化とは、死と罪に対する勝利と恩恵への新たな参与である(エフェソ2・4-5;1ペトロ1・3参照)。また、人間を神の養子にする。というのは、人がキリストの兄弟になるからである。そのことは、イエス自身復活の後「行って、わたしの兄弟たちに告げなさい」(マテオ28・10;ヨハネ20・17)と弟子たちを兄弟と呼んだことから分かる。たしかに本性によれば兄弟ではないが、恩恵の賜物によって兄弟となる。なぜなら、この養子関係によって、復活において余すところなく示された御ひとり子の生命に本当に参与するのである。

655最後に、キリストの復活—そして復活したキリスト自身—は、未来の我々の復活の原理であり源である。「キリストは死者の中から復活し、眠りについて人たちの初穂となられました。…アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです」(1コリント15・20-22)。体の復活を待つあいだ、復活したキリストは信者の心に住む。彼の中に信者は、「来るべき世の力を味わい」(ヘブライ6・5)、その生活はキリストによって神の命の懐へ引き入れられ(コロサイ3・1-3参照)、その結果「もはや自分自身のために生きるのではなく、自分のために死んで復活してくださった方のために生きる」(2コリント5・15)のである。